

会津史談

平成28年(2016)

会津史談九十号特集

昭和六年創刊

第90号



会津史談会

飯沼貞吉長州滞在説の検証

一 はじめに

筆者は飯盛山で自刃した白虎隊士の中で、一人だけ生き残った飯沼貞吉の孫に当たる。貞吉が長州で養育されたという怪文書が届いたのは一九九七年の春だったと記憶している。送り主は堀田節夫氏（故人、西郷頼母研究会主査）。

貞吉を最初に発見したのは「盗賊」であるという根拠のない説が週刊誌に掲載されたこともあり、これも「ガセネタ」と切り捨てることにしたのだが、コトがコトだけに妙に気になった。

筆者が貞吉研究を開始した理由の一つは、これが誤解であることを証明したかったからである。貞吉は「死にそこない」として故郷会津からは白い目で見られ、「生き返るような切腹の仕方は会津武士らしくない」と紙面上で非難され、いじめにもあった。

「宿敵長州の世話になった」などは恥の上塗りのようなもの

ので、到底受け入れることができない。

しかし、調査結果は筆者の期待とは逆になってしまった。この貞吉長州滞在説の真偽に取り組んで足かけ十年。ほぼ納得できるレベルに達したので、この場をお借りしてとり纏めることにした。以下、時系列的に貞吉の足跡を追いかける。

二 飯沼家のこと

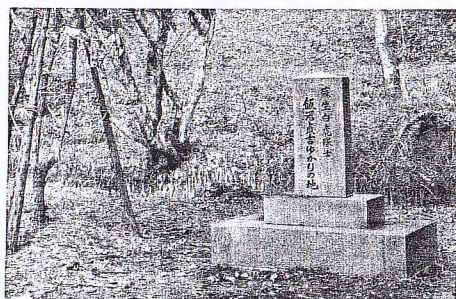
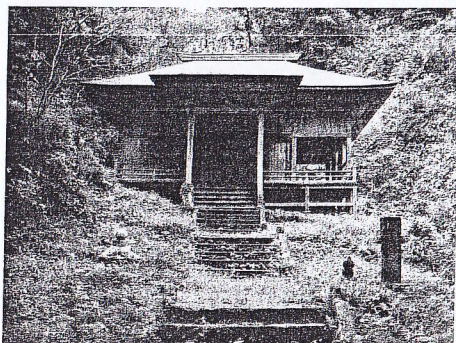
貞吉は一八七一年（明治四）頃に名前を貞雄に変えた。筆者は貞雄が晩年を過ごした仙台市の飯沼家で生まれ育った。飯沼家には貞雄と妻れんの肖像画が掛けてあった。

飯沼家の家系図を西郷家および山川家と関連付けて示す。

貞吉の父親は時衛一正、母親はふみ、雅号は玉章。たまき飯沼家は三人の男子があり、貞吉は次男。長男源八は朱雀隊、弟関弥は戊辰の時六歳。

飯沼家は父方が西郷頼母、母方が山川家と親戚で、父の妹

飯沼 一元



として戦い、戦死。五月には、白河口の戦いでもう一人の叔父友三郎（二十二歳）が朱雀隊士として出陣して戦死した。このときの会津藩総督は西郷頼母、父一正は四十二歳で青龍隊の中隊長として白河に出陣したが、大敗を喫した。この時に長州藩を指揮して大勝したのは、本稿の中心人物檜崎嶺三である。

三、自刃後の貞吉く不動堂で傷を癒す

貞吉は自刃後約一ヶ月間、塩川↓喜多方↓沼尻の不動堂と敵の手から逃れながら傷を癒していた。看病に当たったのは

武具役人の妻印出ハツである。

九月二十二日の鶴ヶ城開城後、飯沼家の若党（家僕）とうた藤太が不動堂にいる貞吉を探し当てた。この間の経緯は文献『白虎隊事蹟』（以下『事蹟』と略記）に詳しい。なお、『事蹟』の貞吉関連事項は、著者中村謙が、一八九三年（明治二十六）に東京で貞吉を取材した結果を取りまとめたものである。

貞吉の避難生活中の心情は、次の記述から読み取ることができる。

療^{りょう}を加え、心潜^{こく}に嘆^{なげ}して曰^いく、「吾^{われ}出陣の際、母^{はは}の諫^{いまし}めし事あり。今疵^{きず}のあればとて、ひとたび飯^{いひ}盛山の朝露となり、蘇^すりしこそ却て不幸の不幸なり。然れども、事茲^{こゝ}に至りては速^{すみ}に疵^{きず}を癒^いし、忍^{しの}びざるに忍^{しの}び、堪^かえざるに堪^かえ、尚^{なお}奮戦後事の策^{さく}あらん」

(『事蹟』)

「母の諫めし事」というのは、出陣に際して贈られた「あずさ弓」の歌のことである。

梓弓向ふ矢さきはしげくとも

引きなかへしそもののふ武士の道

「潔く死んでくる」つもりが自分だけ生き残ってしまったことが不幸中の不幸で、こうなった以

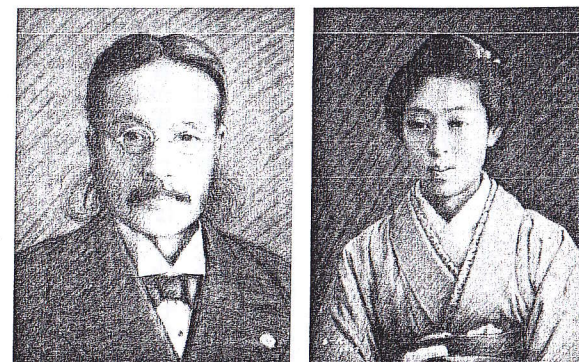


図1 飯沼貞雄とれんの肖像画

は西郷頼母の妻になった千重子、貞吉の母ふみの姉えんは山川家に嫁ぎ、その子供たちが有名な山川一族である。

貞吉と山川健次郎、浩とは従兄弟同士。西郷頼母の妹たちと娘たちは戊辰戦争の時に自刃。弟の関弥は貞吉の九歳下だが、後に会津藩の家令を務めた。

戊辰戦争時の飯沼家では、一八六八年一月五日には叔父の友次郎（二十八歳）が京都で佐川官兵衛率いる別選組の隊士

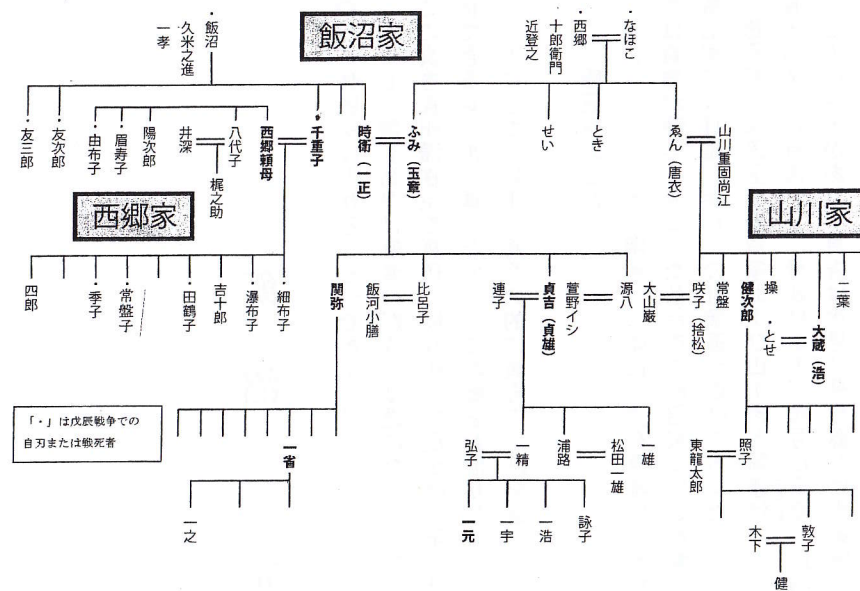


図2 西郷・飯沼・山川家系図

上、傷を癒して再度戦うことが残された唯一の道と考えていた。

その後、貞吉は塩川郊外の下遠田の星初太郎宅に移る。理由は

「当時氏の患部は医薬に乏しきと時期の変遷とによりて益々糜爛し、飲食呼吸漸くにして体勢を養うに至らざりし」

つまり、貞吉の傷は悪化しており、その治療のために星家に約二週間滞在した。

なお、下遠田は藤太の出身地で、叔父で家老の西郷頼母家出入りの職人が住んでいた。

貞吉の日新館の同級生であった河原勝太郎の弟河原勝治が星家を訪れていた記録がある。

戊辰十月三日に叔父の原惣五郎が没し、翌日埋葬、その翌々日（十月六日）に塩川村の西隣下遠田に落ち着いた。下遠田にて白虎隊蘇生者飯沼貞吉氏に遇いが、咽喉の処に猫お白包帯をなし居られたり、其後訪うて八月廿三日弁天山の話を聞かんとする内疵癒えたりと見え猪苗代へ行かれたり。

〔戊辰會津戦争回想談〕 文献②

勝治は会津藩軍事奉行河原善左衛門の二男で、戊辰戦争の貴重な証言を後世に遺した人物である。貞吉は十月六日には星家にいたが、間もなく猪苗代に向かったことが分かる。

猪苗代謹慎所以降の貞吉の足跡について、事績は以下に示す僅か数行しか記していない。

後、藩主の東京に移らるるに当たり、氏も亦護送せられて謹慎の身となり、明治三年十一月、藩主学生を諸方へ遣わさるるに当たり、氏も亦選れて静岡に至り、林三郎の塾に入る。居る事一年、留学生廃せらるるに当たりて藤澤次謙に就く。同氏出仕の身となるに及んで、共に東京に至り、同氏の斡旋に依り電信修技校に入り、遂に業を卒え、職を技術に奉じ、今猶通信省の電信建築署長たり。

〔事蹟〕

貞吉は一八七〇年（明治三）に静岡の林三郎塾（後の静岡学問所）に入った。それ以前のことについては貞吉は話さなかったのだから。つまり、ここに空白の二年間が存在する。

「藩主の東京に移らるるに当たり、氏も亦護送せられて謹慎の身となり」

は松平容保の東京護送に近い時期、即ち年内に貞吉も東京護送され、謹慎の身となった、という意味である。

会津藩投降者の東京護送は、第一陣が佐幕派脱走兵で、第二陣が藩主、第三陣が家老・重役クラスで、その他の藩士は翌年一月以降である。貞吉は第二、第三陣には入っていないので、護送は第一陣ということになる。

そして、第一陣に該当する事項について、長州藩中隊長崎頼三は「毛利家文庫 藩臣履歴」に以下のように報告して

四、猪苗代謹慎所への出頭、白虎隊戦友との再会

貞吉はその後、猪苗代謹慎所に出頭し、そこで白虎隊士中二番隊所属の戦友四人に再会した。その四人とは愛犬クマで有名な酒井峰治をはじめ、遠山雄午、藤沢啓次、荘田保鉄である（文献③ 佐藤一男氏）。

彼らは戸の口原の戦闘では、貞吉の属した篠田隊とは別行動だったので、飯盛山には行かずに帰城した。彼らは飯盛山集団自刃については知らなかったから、貞吉の供述は衝撃的だったと思われる。再会した彼らは、生死を賭けたあの日の体験をお互いに語り合ったことだろう。

白虎隊の悲劇の実態をはじめて公にしたのは、明治二年四月に発行されたわが国最初の新聞『テリカラフ』である。

「此に御談あり。一の老嫗ありて其の子の行方を知らず」で始まり、「何れも白虎隊にて悉く死に就き、一人蘇生せるに因つて、外十五人の姓名も詳らかなりける由なり。かかる幼弱の身として決心の潔きを見れば、成長の後は英材となるべきものありつらんに、惜しきことなりと人々云えりとぞ」と続く文章は、貞吉がこの時に戦友に話した内容が、新聞記者の知るところとなつて掲載されたのであろう。

五、東京への護送、佐幕派脱走兵四百六十余名と共に

いる。

一、同月（明治元年十月）総督府より降兵護送の命之有り、猪苗代に帰り諸藩の脱兵四百六十余人を請取り、同二十四日、千住宿に帰着、降兵隊長二十四人を呼び出し、苦戦の労を慰し、藩々の重役へ残らず引渡し的一件、滞り無く相済ませ差し届出候事。

ここで言う「諸藩の脱兵四百六十余人」とは会津に加担した旧幕兵の内、鶴ヶ城にて籠城戦を戦い会津と一緒に降伏した兵を指し、第三步兵隊（隊長、旧旗本五千石、幕府歩兵頭加藤平内）約二百人、草風隊（隊長、旧旗本五千石、天野加賀守花蔭）約二百人、凌霜隊（郡上藩隊長 朝比奈茂吉）二十六人等合計約四百六十人のことである。勿論、会津兵は含まれていない。出発は十月十二日、護送責任者は長州藩士崎頼三、東京到着は十月二十四日である。

総勢五千五百人もの会津降兵を護送するには、護送体制と共に謹慎預かり体制を決めなければならない。旧幕府脱走兵の謹慎先は元の所属藩に早々と決定されたので、護送の第一陣となった。一方、会津兵は約五千人と人数が多いので、受け入れ体制が決まるまでに時間がかかった。その間の約三ヶ月は猪苗代および塩川に待機させられ、護送は翌年一月以降になったのである。

猪苗代謹慎所には約三千人の会津兵が集められ、在陣参謀

は「高見家の口伝が現在も毎年本家に集まるたびに繰り返されていく」との話を聞き、榎崎屋敷の見取り図も入手した。克也氏は下関教育委員会で教育に関する仕事をされている。高見家に伝わる口伝は、前述の堀田論文の要旨に加えて、① フサの孫久保冬代さんと曾孫の吉井綾子さんはこの話を何度も聞かされた。

② 吉井綾子さんは観光旅行で白虎隊のお墓に詣ったが、其処に新しいお墓が一つあったので、少女の頃の伝承を思い出して近付いてみると、飯沼貞吉の墓だった。

③ 高見家では今でも毎年、小杉の本家に集まって貞吉物語を繰り返し涙する。

④ その理由は、「高見家の誇り」だからである。

⑤ 榎崎については情報が伝わっていない、話題にもならない。というものであった。

一四五年も前に、「傷ついた一少年の世話をした」ことをなぜ五世代にも亘って伝え続けているのか？ よほどの強烈な印象が残ったであろうことは間違いない。

九. 飯沼家に伝わる話

貞吉長州滞在説が史実なら、飯沼家にも何か手掛かりが残っている可能性がある。

一八四五年（弘化二）五月十五日 長州藩士林源八家に生まれる。のち、榎崎豊資の養子となる。身分は馬廻り（Ⅱ大組、八組ともいわれる中級武士）。

一八六八年（慶応四）二月 戊辰戦争に出征（長州藩第一大隊二番中隊司令）当時二十二歳

同年五月一日 白河口の戦いで西郷頼母率いる東軍を撃破して大勝

同年八月二十三日 戸の口原を突破し若松城郭門を破り本城攻撃

同年九月二十二日 会津藩開城に立ち会う

同年十月二十五日 東京に凱旋、若松城突入の功により羅

紗軍服頂戴

同年十二月一日 山口着、長州藩公毛利敬親卿に拝謁し、その後帰萩

一八七〇年（明治三）十月 フランスに国費留学派遣され、横浜を出航

一八七五年（明治八）二月十七日 パリ五区の下宿で肺病のため死亡、享年二十九歳

頼三の生地は前原一誠・奥平謙輔と同じ萩土原である。三人とも萩の名門明倫館に学んだ。明治元年時点での年齢は前原三十五歳、奥平二十八歳、榎崎二十四歳である。いずれも、長州藩中級武士の家で育ったので、幕末革命の中核となった

そこで、洗いざらい家探ししてみたが、何も出てこない。貞雄は妻れんと共に晩年仙台に住んだが、一九三二年（昭和六）没した。れんはその後、一九四五年（昭和二十）まで生きたが、その世話をしたのは筆者の母弘子である。弘子が残した記録には、「貞吉の空白の二年間について、世間は知りがたかった。しかし、貞吉は何も言わなかった。れんも知らない」となっている。

貞吉にとって榎崎屋敷での生活は人生最大の恩義ではあるが、口が裂けても言えない事件だったのだろう。筆者の疑問は、

- ① 自刃失敗で生きる目標を失った少年が、どうして立ち直ることができたのか？
 - ② 貞吉はどこで電信に出会ったのか？
- の二点であるが、その手掛かりは残念ながら飯沼家には残されていない。

十. 長州藩士榎崎頼三

榎崎頼三とはどんな人物だったのか。経歴を略記しておく。

なお、彼は二〇〇ページに及ぶ陣中日記（文献5）を残しており、戊辰戦争に参加した二月から帰郷するまでの三百日間、一日も欠かさず日記を記している。



図6 榎崎頼三
写真は木戸孝允が頼三から受取った手紙の一部

下級武士出身者とは一線を画していたと思われる。

頼三は大村益次郎とは四境戦争以来の仲である。頼三が陣中日記で「先生」としているのは、大村に対してだけで、木戸孝允（後の参議）、山縣有朋（越後追討司令、後総理大臣）などと呼ばび捨てである。

また、同郷の総理大臣「桂太郎自伝」の中に、榎崎頼三に言い及んだくだりがある。

帰国の途中、フランスの都パリを通った。志を同じくして横浜語学所に入校した榎崎頼三は、志を達してフランスに留学中であつた。：榎崎は不幸にして健康を損なっていた。：君は前途有望な人物であるから、学業は中断して私と共に帰国し、国のために事を成そうではないかと勧めたが、彼は聞

かず、今しばらくパリに留まり、学事に励み、さらにベルリンに赴いてドイツの兵制をも研究した上で帰国したいとの希望を述べた。故に、私は遺憾ながら病める友を伴って帰国することが叶わずパリを去った。榎崎は私の親友である。残念なことに彼は志半ばにして鬼籍に入ってしまったが、まことに惜しむべきことである。(文献7)

十一、榎崎家子孫松葉玲子さんの証言

筆者が松葉玲子さんにお会いしたのは二〇一一年九月十八日である。場所は京都。筆者が講演することを友達から聞いて、東京から駆けつけたのである。

頼三には一人娘マツがいた。

閏四月十六日、故郷より書簡来り、家内ならびに親族中の安否を聞く。なお、小児誕生の知らせがあった。直ぐに、各隊へ酒料として一両ずつ与え、本陣は大いに酒軍を張り、忍藩隊長等を招く。この戦に勝つことを祈願し、子供の誕生を祝うためである。

〔陣中日記〕 文献8)

頼三の一人娘マツは一八六八年(慶応四)三月十二日に生まれた。頼三が陣中日記に「私事」を記したのはこれが唯一である。酒宴を張って祝うとは、よほど嬉しかったに違いない。

松葉玲子さんは一九三五年(昭和十)三月一日生まれで、

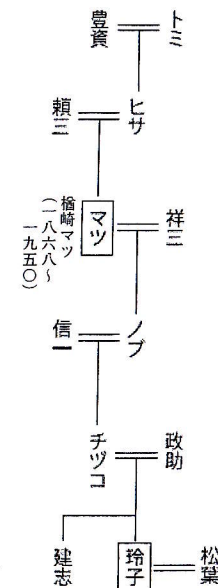


図7 榎崎家系図

頼三-元様

頼三-元様から質問

- 1) 可能な限りお答えします。比較的読売新聞と京都新聞の内容としては良かったと思えます。基本的には新聞記事の通りですが、私はマツ祖母の側から見て、頼三は貞吉(敬称は略せし頂きたい)の母親に密書を盗み、「お宅の息子には見所がある」と、私が美称で養育して下さる心配しなさい。下さい。(しかし、この手紙の内容は、ご主人に「中々ない」と書いまして、(当時は家族の秘密です)
- 2) マツ祖母は萩の藩士で、一緒に生活して居ました。(父は当時海軍中佐、大型戦艦に乗る、横須賀港に残り、萩に家族は帰郷) 私は昭和10年生れで、マツ祖母は昭和25年に亡くなりました。6年近く一緒に生活し、口伝で、頼三の手書は、見ることが出来た。

二〇一一年十月六日
松葉 玲子

図8 松葉玲子さんから受取った手紙の一部

マツのひ孫に当たる。父親が海軍中佐で一家は横須賀に住んでおられたが、勤務の都合で長期不在となったことから、子供たちを山口県萩市河添の榎崎マツの実家に帰郷させた。

マツが亡くなったのは一九五〇年(昭和二十五)十二月四日。玲子さんは十歳十五歳の六年間をマツと一緒に生活したという。マツおばあちゃんからは、密書のこと、他言無用のこと、さらに、頼三がパリから送った手紙には「貞は元気か?」と書かれていたことなどを聞かされたという。

密書は頼三が貞吉の母親宛に出し、内容は「お宅の息子さんは見所があるので、美称で養育するので心配しないように。また、このことはご主人にも申されるでない」と書き添えたという。

また、頼三は家には殆ど帰らなかったという。

なお、これまでこの話を一切開示しなかった理由は、「他言無用の言い伝えに加えて、榎崎家は弟健志が跡を継いでおり、嫁に出た自分が言う立場になかった」としている。

今回、証言した理由については、「死ぬまで自分の胸にしまっておくのはどうか?」という自省と、二歳下の弟は自分が聞かされた話を知らないかもしれない」としている。

十二、榎崎豊資のこと

頼三が帰郷したとき、マツは生後九ヶ月。フランスに留学

した時には未だ二歳七ヶ月である。

マツは誰からこの話を聞かされたのか? マツが生まれたのは榎崎屋敷である(榎崎健志氏談)。頼三は榎崎屋敷には殆ど来なかった。マツを榎崎屋敷で育てたのは、祖父母豊資とトミおよび母ヒサであろう。従って、マツおばあちゃんの伝承には豊資が重要な役割を担っているはずである。

豊資の略歴を紹介しておこう。

一八三三年(天保四)四月五日生まれ。榎崎家は代々女系で、豊資は萩藩大組士(禄高九三石八斗)の養子となり第二十五代を継いだ。妻トミとの間に一八四九年(嘉永二)一人娘ヒサが生まれている。給領地(知行地ともいう)は美祢小杉。この地には十二軒の農家があり、庄屋は高見総本家であったが、榎崎はここに仮屋敷(通称榎崎屋敷)を構えた。小杉集落は、萩と下関の間、ひっそりした山間にある。一八六九年(明治二)には毛利家臣給地召上げの沙汰が出ているので、榎崎屋敷はやがて高見家の所有となったであろう。

豊資は、一八六八年(明治元)十二月三日に毛利家の千枝姫様のお紐離お祝いに、翌年三月には興丸君(毛利元昭公の幼名)の鎧初召に参式している。

豊資一家は廃藩置県後の明治五年に東京品川の毛利藩邸に移住したが、この時マツも一緒だった。明治八年に頼三が没すると豊資は遺髪を東京芝罘聖寺に埋葬した。

豊資はその後、東京白金台でマツと一緒に生活したが、明治二十五年に逝去した。

十三、貞吉養育説の検証

以上で、高見家と榑崎家という立場の異なる二つの家系からの証言が得られた。

高見家証言については、フサが一緒に生活していたのであるから、強い印象が残る、代々語り継がれてきたのであろう。ここで残念なのは、物証が無いことである。頼三がフランスから出した手紙が発見され、「サダさー、元氣か」とでも書いてあれば、完璧なのだが、残念ながら未だ見つからない。

榑崎家証言については、マツが当時九カ月の嬰兒であるから、記憶に残るはずはないなどの疑問が残る。マツがひ孫の松葉玲子さんに語り伝えたとなれば、マツ自身が貞吉に強い関心を抱いたに違いない。

では、いつ、どこで、二人に何があったのだろうか？

これを読み解くために、貞吉のその後と榑崎家のその後の関係を調べてみた。

筆者は、マツは物心がついてから貞吉と直接会ったのではないかと考えている。

その可能性の一つは、頼三の死に際して。頼三は一八七五

待と信頼を寄せていたことが伝わってくる。

一方、貞吉は当時は山口勤務であったが、官歴書に三月九日に上京したと記している（理由は書いていない）。

ここで、頼三の訃報が豊資から貞吉宛に送付され、貞吉はこれに应运て上京したという仮説が成立する。当時マツは八歳、マツは幼児期の僅かの時間を父と過ごしただけで遺児となってしまった。成長し電信技士となった貞吉と初めて会い、そのいきさつを聞いて感銘を受けたとしても不思議ではない。そして、それがひ孫に伝わっていったのではないだろうか。

マツが貞吉と会ったもう一つの可能性は、豊資の葬儀である。頼三が没した翌年一九七六年（明治九）九月に榑崎家は東京白金台に一万坪の土地を購入し、自邸を建てた。この土地には後に明治学院が建つ。なお、明治学院を創立したのは、ヘボン式ローマ字で有名なヘボン博士であるが、副総理は会津藩士井深梶之助（貞吉の二歳下）である。

この広大な一等地を入手したのは頼三の養父豊資であろう。頼三が戦功で得た報償金が購入資金の一部になったかもしれない。マツはここで育った。マツのひ孫の松葉玲子さんは、マツおばあちゃんから「白金屋敷にはタヌキやキツネがよく出た」と聞かされたという。

豊資は一八九二年（明治二十五）四月に東京で死亡した。

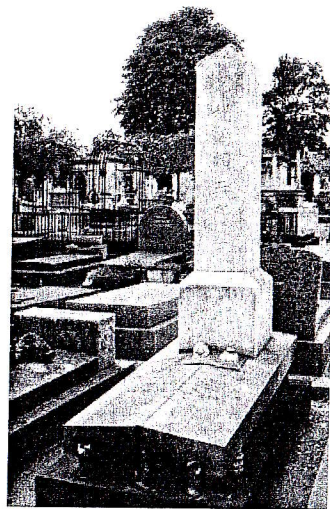


図9 榑崎頼三の墓
パリ市モンパルナス

年（明治八）二月十七日にパリで死亡し、遺体はモンパルナス墓地に埋葬された。一方、豊資は一九七二年（明治五）から東京勤務となり、一家は毛利家屋敷のある品川辺りに住んでいた。豊資は日本に送られてきた頼三の遺髪を東京芝の瑞聖寺に埋葬した。時期はおそらく三月初旬ではないかと推測される。

豊資は『陣中日記』の巻末に以下の文を付記している。

この書は我が子頼三が陣中にて筆記せるものなり、非凡であつたがゆゑに、早く身まかつてしまつた事が何とも惜しく、折にふれこの書を見るにつけても、過ぎし日の事などを思い出し、老の涙の種となるのは儚き事である、

明治廿二年十月

豊資

豊資は頼三の夭折をいかに無念に思ったか、また頼三に期

この時、貞吉（貞雄）は広島勤務だったが、官歴書には二月に上京したと記録している（理由は書いていない）。また、除籍謄本には、この年の六月十八日に生年月日の訂正願を提出したとの記載がある（一八五三年（嘉永六）三月二十五日を一八五四年に訂正）。

贈本は福島県会津若松市発行になっているので、貞雄はこの時會津まで出向いた可能性がある。なお、貞雄はこの年の十二月一日付けで東京電信建築署主任となっている。広島勤務の貞雄が、この年の五月に上京したとすると、命の恩人豊資の霊前に墓参し、マツと再会したという仮説が成立する。

この時、貞雄は三十八歳。マツは二十四歳で未婚であった。マツが祥三を養子に迎えたのは一八九四年（明治二十七）、二人の間に長女チズ子が生まれ、チズ子と政助の間に昭和十三年三月一日に生まれたのが長女玲子さんである。マツが豊資の墓前で貞雄に再会したとすればどんな展開が予想されるだろうか？

父頼三の印象が希薄なマツにとって、貞雄は形見の兄のような強烈な印象となって残り、その逸話を孫の玲子さんに語り伝えたとしても不思議ではない。

十四、榑崎屋敷での生活

では、貞吉は榑崎屋敷でどんな生活を送ったのだろうか？

高見家五代目の吉井克也氏に再現してもらった檜崎屋敷の間取りは、書斎や客間を含めて部屋数は六間、外に厠、風呂、馬屋が付いている堂々たる構えとなっている。

周囲は見渡す限り田圃で農家が点々としているだけの、寂しいところである。

貞吉はここで自刃騒ぎを起こした。彼は生きる目的を見いだせないでいた。また、喉の傷は塩川を出てから二カ月もの

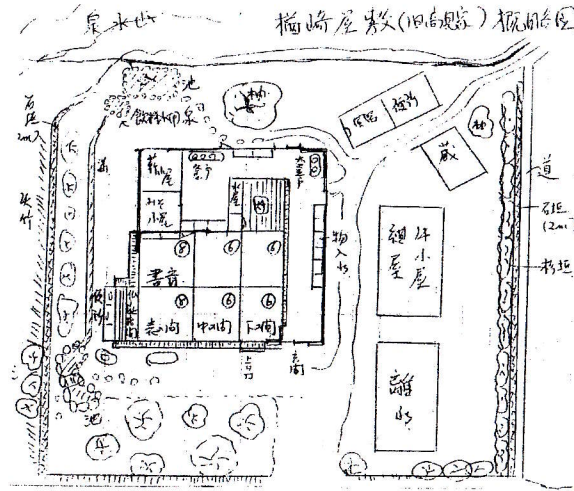


図10 檜崎屋敷見取り図 (吉井克也氏作成)

長旅で、再び悪化していたと思われる。高見フサは、貞吉の身の回りの世話と看病を通して、喉の傷と心の傷を癒すの心を砕いたのだろう。

この時、貞吉は「謹慎の身」であるから、静かに勉学に励んだことであろう。頼三と豊資は衣食住に加え、勉学のために参考書を与えたであろう。この時期の会津藩士は衣食住に汲々としており、ましてや参考書など望むべくもなかった(柴五朗の遺書『ある明治人の記録』(文獻10)参照)。その意味で、貞吉は幸運と言えるかも知れない。

しかし、貞吉にとっては生きる目標を簡単には見いだせなかったであろう。

檜崎頼三のその後は、

明治二年 山口文学寮(山口明倫館)文学寮と兵学寮とからなる)

明治二年十二月十八日 横浜語学所

明治三年五月十二日 兵学寮

明治三年十月二十七日 横浜出航してパリに留学

と多忙である。頼三は有能で武勲多く、目を海外に向けて更に転進を考えていたに違いない。長州では知行地の返還を早めに進めていたことを勘案すると、頼三と貞吉の接触期間は僅かだったと考えられる。そして、高見家の伝承の中に檜崎

の情報は全く残っていないことから、貞吉は日常的には高見家に世話になったものと思われる。

しかし、檜崎頼三は、大村益次郎、木戸孝允、山縣有朋、桂太郎らと交流が深く、将来を嘱望された人物である。頼三との出会いは貞吉のその後の人生に大きなインパクトを与えたことは間違いないまい。

十五 電信との出会い

貞吉は明治五年に工部省の下級見習いとして任官され、以後電信の道一筋に生きた。貞吉と電信の出会い、どこにあったのか？

死に場所を求めてさまよっていた彼にとって生きる目標が出来たのは「電信」との出会いだったと筆者は断言できる。陣中日記の中に気になる一行がある。

(明治元年)十月十五日 晴れ 呼頂原屋、書籍数部を得る。

(陣中日記)

この時、頼三は本屋を呼んで書籍を何冊か入手したのである。二月に東山道先鋒の任についてから八ヶ月、各地を転戦し、会津を攻め落としてその任務をほぼ完遂した時期である。この間は書籍を入手するどころか、本を読む時間もなかったことだろう。

東京に凱旋して直ぐに日本橋の本屋に声をかけた。「頂原

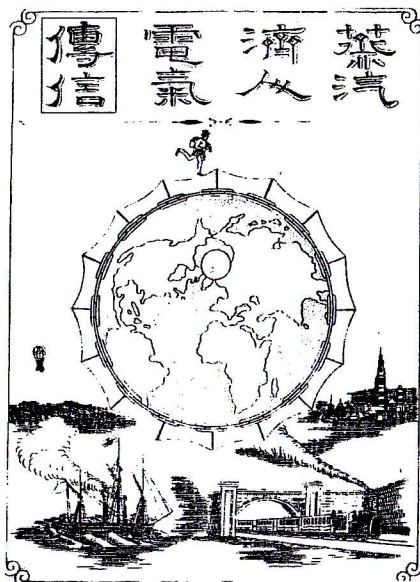


図11 西洋事情初版本表紙 1866年(慶応2)

屋」は「須原屋」の間違いで、当時須原屋という大手の本屋が日本橋にあったことが確認されている。

本屋は慶応二年(一八六六)に初出版された当時のベストセラー『西洋事情』(文獻9)を持って来たに違いない。著者の福沢諭吉は、一八六〇年(万延元)から一八六七年(慶応三)までの間に米国に二度、欧州に一度渡航しており、当時最も海外経験の豊富な日本人の一人であった。

頼三は落ち込んでいた貞吉に、『西洋事情』を手渡した。この本には「電信機」が紹介されていたのである。なお、この時期に『西洋事情』を子弟教育に使ったことは文獻10 P 66にも出てくる。

しかし、電信については「電信機とはエレキトルの気力を以って遠方に音信を伝えるものを云う。エレキトルの力は古来支那人の全く知らざる所にて、おのずから本邦人の耳目にも慣れず。之を簡約に弁明すること甚だ難し」と記されている。つまり、福沢にしても説明不能と匙を投げざるを得ないほど難物なのである。

じっくり勉強しない限り、簡単に理解できるようなものではない。

わが国の電信（今の電報）創業は、一八六九年（明治二十二月）の東京築地―横浜裁判所間三十二kmの開設に始まる。明治三年八月には東京―長崎間一千三百四十kmの開通に着手した。

貞吉は電信と出会ったのは、正に我が国の電信の黎明期であり、若い貞吉を夢中にさせるだけの魅力があったと言える。

十六、貞吉長州滞在の意義―恩愛の碑

以上に述べてきたように、貞吉長州滞在説は十分な説得力をもつ。特に、筆者にとっては貞吉が電信技術で身を立て、生きる目的を見出した背景が納得できるのである。当時の会津人にとって、官職と言えは教師か警官ぐらいのモノであ

これを、単に「世にも珍しい出来事」で終わらせて良いのか、後世に残すだけの価値があるのか、孫として迷うところである。

一方、山口県美祢市では、「恩愛の碑」という記念碑の建設に向けて、実行委員会が活動を開始している。二〇一六年十月除幕を目標に総工費四〇〇万円を投じるとのことである。背景には、長州と会津の友好を促進したいとの願いがあるのは勿論である。

一七、むすび

会津と長州のわだかまりはなかなか消えない。両者の価値観は対極と言ってもよい程の違いがある。長州は「機を見るに敏、臨機応変、目的のために手段を選ばず、なんでもあり、実践主義」に近く、会津は「おっとり、愚直、義にこだわる、ならぬことはならぬ、精神主義」に近い。ましてや、戊辰の歴史認識には、いまだに、大きな乖離がある。

長州側が、「敗者が何時までもうらみがましいことを言うのはいかがなものか。会津藩は状況認識が甘く、危機管理能力や指導者に欠けていた」と言えば、会津側は「長州が会津でどんな非道を働いたか、その史実から顔を背けているうちは話にならない。正しい歴史認識が先決である」などとやり返すが、これでは際限が無い。

る。明治五年に見習いといえ任官になったのは、檜崎屋敷で西洋事情などの書物と勉学の機会が与えられた賜物である。

飯沼貞吉は飯盛山で自刃した白虎隊士の中で、唯一生き残ったという数奇な運命を辿った。さらに、あろうことが長州で養育されるという誰にも言えない秘密を背負って生きた。

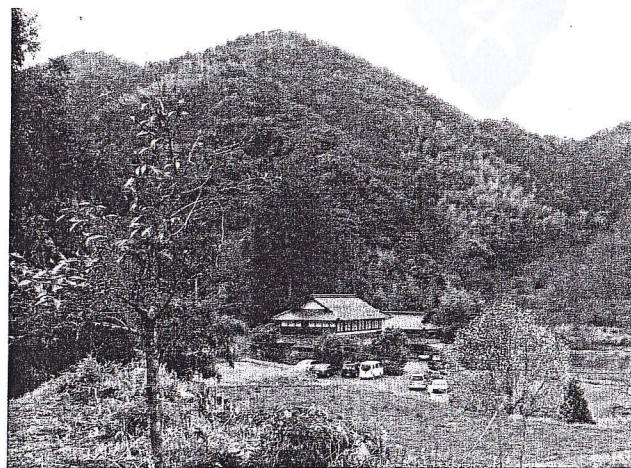


図12 檜崎屋敷跡から会津を望む（赤い屋根は高見家）

貞吉と同じ時期に長州藩士奥平謙輔の世話になった白虎隊士山川健次郎は、「奥平謙輔先生」と呼んでその書を晩年まで自室に飾っていたという。東大総長を務めた健次郎は少年期の異質文化との出会いがいかに大切かを認識し、会津・長州の怨念などを超越していたのだろう。

貞吉の長州滞任が「長州と会津の友好」の架け橋の一つになってくれれば、大変有難いことだしそう願いたい。長州のティー・ビー・オー（TPO: Time Place Occasion）的発想と会津の「ならぬことはならぬ」という絶対規範は相反する理念であるが、お互いにその真意を理解し合って欲しい。そして、その鍵は、義を重んじることだと思う。

頼三と貞吉は、共に義を大切にした人間関係だったと信じている。

参考文献

- 文献1「白虎隊事蹟 飯沼貞雄君の事蹟」 中村謙 明治二十七年 河井源蔵編 国会図書館
- 文献2「戊辰會津戦争回想談 其二」 河原勝治 昭和三年 会津会雑誌三十二号
- 文献3「飯沼貞吉―白虎隊蘇生者」 佐藤一男 平成十六年 幕末・会津藩士銘々伝 三十五頁
- 文献4「恩愛の絆」 堀田節夫 平成九年 蒙談第二十四号

蒙談会

- 文献5 「文部大臣 高見三郎傳 小杉の巻」 浦上 豊 昭和五十六年 私家版
- 文献6 「飯沼貞雄と榑崎頼三のこと」 金本利雄 平成九年 蒙談第二十四号 蒙談会
- 文献6 「恩愛の絆」 楠 堀田節夫 平成九年 蒙談第二十五号 蒙談会
- 文献6 「長州藩士榑崎頼三と白虎隊士飯沼貞吉」 金本利雄 平成九年 蒙談第二十五号 蒙談会
- 文献7 「公爵桂太郎傳」 徳富猪一郎 大正六年
- 文献8 「榑崎頼三陣中日記」 榑崎頼三 明治元年 榑崎豊 資による写本は明治二十二年
- 文献9 「福沢諭吉著作集 第一巻 西洋事情」 平成十四年 福沢諭吉 慶応義塾大学出版会
- 文献10 「ある明治人の記録」 石光真人 昭和四十六年 中央公論社

寄贈図書

(平成二十八年三月迄)

- 。歴史春秋 第81号・第82号 会津史学会
- 。土佐史談 第258号・第259号・260号 土佐史学会
- 。歴史文芸研究 臨時別冊 せたな歴史文芸研究会
- 。民具マンスリー 第48号 1号〜9号 神奈川大学日本常民文化研究所
- 。会津会会報 第121号 会津会
- 。史談河東 第78号 河東町史談会
- 。概説水戸市 水戸市
- 。水戸歴史学への招待 水戸市教育委員会
- 。水戸の教育 水戸市教育委員会
- 。現滴余情 中西達治
- 。持続する志(1〜7) 会津藩公用方 秋月俤次郎 中西達治

